

高浜虚子生誕150年 令和6年新春特別展

# 若き虚子



# 子規と歩む

令和5年 12月23日(土) ~ 令和6年 2月5日(月)

休館日 令和5年12月26日、令和6年1月9日・16日・23日・30日(いずれも火曜日)

開館時間 午前9時~午後5時(展示室入場は午後4時30分まで)

会場 松山市立子規記念博物館 3階特別展示室

観覧料 個人200円、団体160円、65歳以上100円、高校生以下無料

## 関連イベント

### 《ギャラリートーク》

日時：令和6年1月6日(土)・2月4日(日)、ともに午前10時30分から50分程度

会場：3階特別展示室 ※聴講には観覧券が必要

### 《学芸員による関連講座》

演題：「それでも、ともに一虚子と子規の思い」

日時：令和6年1月20日(土) 午前10時30分~正午

会場：1階視聴覚室 ※入場無料

※空調工事中のため、暖かい服装でお越しください

問い合わせ先

## 松山市立子規記念博物館

TEL089-931-5566 〒790-0857 松山市道後公園 1-30 <https://shiki-museum.com>

高浜虚子生誕150年 令和6年新春特別展

# 若き虚子

## 「子規と歩む」

令和六（二〇二四）年は、俳人・高浜虚子（一八七四〜一九五九年）の生誕一五〇年です。虚子が子規の助力を得て明治三十一（一八九八）年に継承した俳誌『ホトトギス』は現在も発行が続けられ、近代俳句界の巨匠として虚子の存在は今なお俳句界に光彩を放っています。

虚子は大正三（一九一四）年、子規の十三回忌に記した「子規居士追懐談」（『ホトトギス』子規居士記念号）を「余の生涯は要するに居士の好意に辜<sup>あ</sup>負した生涯であったのであろう。」と締めくくりました。「辜負」とは「そむく」の意です。虚子は、子規の俳論「明治二十九年の俳句界」のなかで、親友でライバルともなった河東碧梧桐とともに「新機軸を出したる」俳人として大々的に紹介され、のちに「子規門の双璧」との評価を得るまでになります。その虚子はなぜ、「子規の好意にそむいた生涯」と表現したのでしょうか。

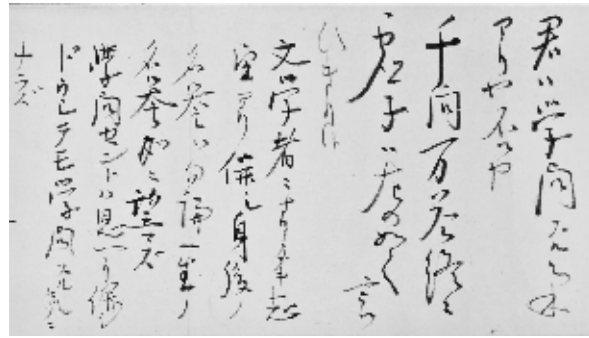
虚子は明治二十四（一八九二）年、十七歳のときに学友の碧梧桐を通じて七歳年上の子規に師事し、俳人子規の草創期に俳句仲間に加わりました。先輩文学者の子規に魅せられ、文学者を志す虚子ですが、学問を好まず、放蕩の日々を送ります。明治二十五年に京都三高に進んだ虚子は同校を退学・転学した後、同二十七年に仙台二高をも退学します。そんな虚子に対して、子規は落胆しながらも粘り強く説諭を続けました。一方の虚子も、ときに手厳しい子規の言葉に心を痛め、反発しながらも、創作の手は止めませんでした。

明治二十八（一八九五）年十二月、子規に道灌山（<sup>どうかんやま</sup>）へ呼び出された虚子は、学問を修め、子規の文学事業を継承してほしいとの望みを完全に拒絶します。それから三年あまりが経過した明治三十一年七月、二十四歳になった虚子は、子規に誓いを立てたうえで俳誌『ホトトギス』を継承するに至ったのです。子規は虚子の俳句を「縦横」と評価し、虚子と子規は明治三十五年に子規が亡くなるまでの十年あまりをともに歩み続けました。

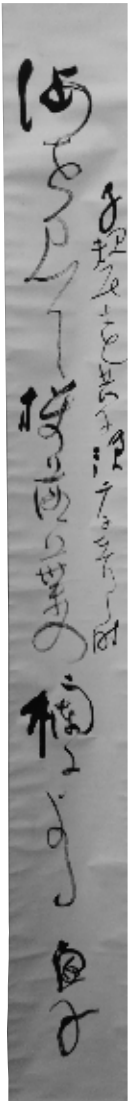
今回の新春特別展では、虚子の子規との出会いから別れまで、そして子規という後ろ盾を失って以降の歩みを物語る資料を一室に展示し、虚子がのちに「子規門の双璧」の一人と称されるまでに成長していくようすを紹介します。



高浜虚子句  
「大空に羽子の白妙とぐまれり」



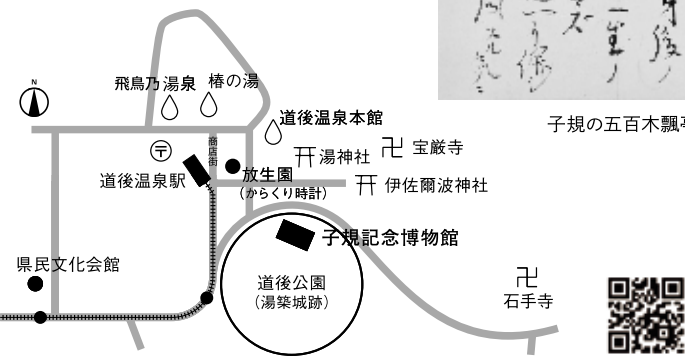
子規の五百木飄亭あて書簡（明治28年12月10日ころ）



高浜虚子句「海を見て松の落葉の欄による」



第1回蕪村忌記念写真（明治30年12月24日）



道後温泉駅より徒歩約5分／道後公園駅より徒歩約5分  
※改修工事のため駐車場が使用できない場合があります。公共交通機関をなるべくご利用ください

松山市立子規記念博物館  
〒790-0857 松山市道後公園 1-30  
TEL 089-931-5566 <https://shiki-museum.com>